

中野堂治全

第五

中野重治全集

第五卷

筑摩書房版

中野重治全集第五卷

昭和三十六年十一月十日 発行

定価 四二〇円

著者 中野重治

発行者 古田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 小倉 正風
東京都三鷹市上連雀九九〇

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(291)七六五一(代表)
振替東京一六五七六八
印刷株式会社三省堂
製本株式会社高陽堂

目次

梨の花	三
-----	---

解題(且原純夫)	四〇九
作者あとがき	四二

中野重治全集
第五卷

梨の花

一

良平は一升徳利をさげて高瀬屋の店を出た。やはり徳利だ。樽にしてくれとは、いつのまにやらいぬようになつてゐる。高瀬屋のおんさんが、良平を小学校生徒あつかいするからだ。

「もう学校へ行きなるとか。えらいのオ……」

いつかそういわれた。そういわれた以上、樽にしてくれぬかとは言にくい。良平は我慢をして、どこまで行つたら手を持ちかえるか頭で見当をつけてゐる。

松岡屋の前をとる。松岡という村が、どこにあるかは知らぬがどこかにある。おおかた、その松岡の村から出てきて、先祖がだが、呉服屋をはじめたのだから。それで松岡屋という。あれは屋号というのだ。大人たちの話からして、きつとそうだろうと良平は思う。竹田屋というのは、やはり竹田の村から出てきたにちがいない。竹田は山つきにある。そういえば、今出てきた高瀬屋は、あれは高瀬から先祖が出てきたのだから。高瀬の村は行つたことがある。竹田や松岡は行つたことがない。

松岡屋のうれんの下から、中にいるお客の足のところが見える。草鞋に脚絆をはいてゐる。足袋な

しで草鞋だ。女の足だ。何でかはわからぬが、女の足なことにはまちがいない。あれは山つきの方の女だろう。山つきの方の人は、言葉もちがうがはきものもちがう。草履でもちがう。山つきの方の人は足なかのような草履をはいたりする。このお婆さんは、松岡屋のおんさんやお婆さんに、切れの相談をしているのだろう。おなしことを何べんも訊いて、松岡屋のうちのものから少しあなずられているのだろう。それは松岡屋がわるい。

良平はこんにやく屋の前をとおる。こんにやく屋は魚屋だが、何でこんにやく屋か。むかし、こんにやく屋だったのだろう。今でも、こんにやくを売っていることはいる。こんにやく屋には年よりのおんさんと若いおんさんといふ。年よりのおんさんは髭を生やしている。若いおんさんは非常に元気がいい。夏の屋根ふき時分に——それとも、五月のそとめさまのくる時分だったか。——車を曳いて村へ鯛売りにくる。

「いわあし、わし、わし、わし……」

お天氣のいい日にきまつている。声が村中にひびく。平生は村へは売りにこない。

このこんにやく屋には年よりお婆さんがいる。いつも帳場にいろが今日はいない。このお婆さんは「じよろしゆあがり」だと聞いたことがある。「じよろしゆ」というのはわからない。「あがり」というのもわからない。このお婆さんはちがう言葉つきをする。良平は、あれは大阪の方の人だろうと思う。遠方から嫁にくる人はある。何で大阪だろう。大阪へ行つたものがああいう言葉つきをするからそうだろうと思うのだな、と思う。

村からは毎年大阪へ行くものがある。若い衆が行く。若い衆が、だれでもではないが、大阪へ「ぬげて」(逃げて)行くのだ。

「山崎の吾一つあん、大阪へぬげつてつたと……」

「ほ、やつぱりぬげてつたか。おとつあん、連れに行かんならんな。また、物いりじやわい……」
大人のそんな話を、良平は何べんも聞いたことがある。逃げて行き方もだいたい良平は知っている。
十七八になると、その若い衆が、だれもない時に町から米屋を呼んでくる。それは、稲刈りも粃すりもすんで、米が「ひよう」（俵）になつてからにきまつている。若い衆が米の俵を売る。親にかくして一俵売る。その銭を持つて、一里あるいて新庄から汽車にのる。父親があわてて連れに行く。たいていそれで帰ってくる。そんなのは言葉つきは変らない。

迎えに行かぬ家もある。行つても連れて帰らぬときもある。そんな若い衆が、二三年して——といつても、良平には何年だかよくわからない。——言葉つきが變つて帰ってくる。それが良平の家へも挨拶にくる。そのときは粟おこしというお菓子を持つてくる。平べつたい板になつたお菓子で、良平はこれが好きだ。包み紙に大黒様の絵がかいてある。「粟おこし」と字で書いてある。「おこし」は仮名だから、これだけは良平にも読める。それでも、言葉つきは變つていてもこんにやく屋のおばさんのとは少しちがう。似ているのは女の場合だ。

女は逃げては行かない。女は奉公に行く。そして病氣になつて帰ってくる。

家じゆう出はらつた中で、病氣になつて帰つてきたその家の娘が、番をして一人でいる。そこへ子供が遊びに行く。そこへ若い衆が話をしにくる。女衆は雑巾ぞうきんを刺している。

「大阪らア、おもつしよいじやる。」と若い衆がいう。

「なあも、おもしろいことあれへん。」と女がいう。

あるとき、山崎のお種さんという娘が、牛の乳のことを「ぎゅううち」といつたのを不思議に思つて聞いたことが良平にある。そんなのがこんにやく屋の年よりおばさんのに似ている。おばさんは、「ぎゅううち」とはいわなかつたが。

良平は田中屋の前をとる。田中屋はお菓子屋だ。しかしここは、村から出てきたのではないだろう。田中という村はない。村からきたのかも知れぬが。田中屋の田中は苗字だろうと良平は思う。良平は、おじさんと町へきたついでに田中屋で飴湯を飲むことがある。この飴湯が良平は好きだ。

どんな仕掛けになつてゐるのか良平にはわからない。しかし飴湯はいつでも熱かつた。箱がある。箱に金の釜がはめこんである。その釜から、「かね」（金）の柄杓で田中屋がコップに汲んで出す。コップは、まわりに削りとつたような縦のすじがある。それがきらきらする。茶色の飴汁はとろりとしてゐる。生薑の汁がはいつてゐるのがうまい。しかし今はない。あるのは夏のうちだけだ。田中屋が店がきれいなのも良平は好きだ。飴湯の台箱のところにも、いつもちゃんと洗つた布巾がかけてあつた。田中屋は、飴汁が垂れても垂れなくても一々それで釜の縁を拭いた。ただお客と話しながらもそこらを拭く。

とうとう良平は「じよつさま」の前へ出た。「じようおう寺」とか「じようほう寺」とかいうお寺だ。どつちがほんとうの名か良平は知らない。ここまできて良平は手を持ちかえた。

「じよつさま」は嵩ばつたような大きなお寺だつた。町にはお寺が何軒もある。良平の知つてゐるだけでも六軒ある。まだあるかも知れない。その中でもこの寺は大きかつた。この寺には、町の高等科へ行つてゐる「おしんぶつつあん」（お新発意様）がゐる。この「おしんぶつつあん」は、ひよろひよろ痩せてゐる。顔がほんとうにあおい。痩せて青い顔をした人はいるが、この「おしんぶつつあん」ほどのはいない。わけても子供ではない。背が高くて、顔が細くて、鼻が尖つて、口許も尖つてゐる。それが、着物の上に衣を着て歩いてくるのに良平は何べんも出会つたことがある。首をまつすぐにしたまま、歩きながら良平をちらりと見る。目玉だけで見てすれちがう。にこりともしなければ、そのほかにどうともしない。夏でも寒そうな顔をして、手が見えないように衣の袖をくつつけて、足ばやに行つてしまふ。幽霊みたようなこの「おしんぶつつあん」が、あるとき声を出すのをすれちがいざまに良平は聞いた。

伴の人に何かいったのだつたが、声が大人のように低いのに良平はぎよつとした。

良平は、「おしんぶつつあん」が痩せて青いのおかしなことに思っている。ここの「ござん」(御前)は金縁眼鏡をかけた恰幅のいい人だつた。「ごしんさん」もよく肥えた美人だつた。何で「おしんぶつつあん」だけがあんなだろう。お寺方は御馳走も食てるはずなのに……

「じよつさま」の横手に「どじようをとる家」がある。ほんとの商売は良平は知っていない。ただ時々、良平のところで、この家のおんさんに頼んでどじようを売ってもらうことがある。このおんさんは、良平のことを覚えていて、良平を見かけると言葉をかけてくれる。

「おお、いま帰んなるか……」

「あい……」

今日はいない。ここで町が終る。そこに川がある。その川ぶちの、「じよつさま」の背中になる長い板塀にいくつも看板が貼つてある。人の顔の絵のはいつたのがそのうちに三つある。

一つは鳥の毛の帽子を冠つた八字髭の人の絵だ。帽子は三角の帽子で、その山型のへりに白い鳥の毛がついている。この人はいかにも色の白そうな顔だ。これは「仁丹」の広告看板だ。

一つは禿頭で鉄ぶち眼鏡をかけたおんさんの絵だ。この人には、鼻の下、口のまわり、顎からおとがいにかけて束のように大きいひげがある。長い顎ひげはまつくろに縮れている。「仁丹」の人よりもからだも大きそうだ。これは「大学目薬」の広告看板だ。

もう一つのも大きな顎ひげのおんさんだ。これは頭は禿げていない。髪の毛をのばして、長目の角刈りのようにしている。鼻がずつと大きくて高い。ひげも一番大きくて長い。顔をちよつと斜かにしている。からだは、「大学目薬」のよりもつと大きそうだ。これは「ダンロップタイヤ」の広告看板だ。

三つの看板はあちこちにある。いつでも並んでいるとは限らぬが、この三つは良平はよく覚えてしま

つた。このなかで、「ダンロップタイヤ」のは西洋人ではないかと思う。ただ良平は、西洋人というものをまだ見たことはない。しかし西洋人だろうと思う。良平は「仁丹」は知っている。「大学目薬」も知っている。「大学目薬」は、細い箱にはいつた薬そのものを見たことがある。しかし「ダンロップタイヤ」がわからない。自転車サイクリングの絵がついているから、自転車に關係のあるものかとも思うが、そこははつきりしない。ダン——ロップ——タイヤ。この、ダン——ロップというのが良平は好きだ。ダン——ロップと口でいつてみる。気持ちいい。三人のうちで、このおんさんが一番偉いような気がする。

橋の詰からちよつと行つたところに、岸の草のところにしやがんでいつものおんさんがやつぱり鰯いわしを釣っている。魚を釣るものはぎょうさんいるが、このおんさんおんさんのようなのはいない。このおんさんは、何が商売なのか誰にも——子供には——わからない。このおんさんみたよに、年百年中さかなを釣る大人はほかにいない。それでも、魚つり商売でないことは子供にもわかつている。

このおんさんは青ぐろい顔をしている。煙管をくわえて、腰に犬の毛皮の四角いのをさげて、それを敷いて岸に腰をおろしている。誰とも物をいわぬ。子供にもにこりともしない。良平たちは、大人でも魚釣りににはバケツを提たげて行く。鰻うなぎなんかは、枝に通してさげて帰る。このおんさんだけが特別の容れものを持つてゐる。ブリキの小判型の箱で、上に網が張つてある。箱に水がはいつてゐる。釣れたのをその中へ入れて、上で網をしぼる。

誰でも、釣れると声を出して叫ぶ。

「釣れた……」

「釣つたぞ……」

叫ばぬまでも笑い顔になる。このおんさんだけ一つも声を出さぬ。にこりともしない。黙つてブリキに入れて、黙つてまた糸を投げる。子供たちも、あんまり傍まで行つてみては悪いような気がする。

おんさんはあちこちと釣つて歩く。良平の家の横手の川へもくる。秋から冬になると、村のものは誰も魚つりはしない。このおんさんは、霰こがが降るようになってからも釣りに出る。空が寒く曇つて、野にだれも出ていない日、その野のどこかに、このおんさんの黒いかげが小さく見える。道も何もないところをそれが動く。川がそこを流れている。おんさんが岸づたいに動く。

このおんさんが何か病気だということを良平は知つてゐる。誰から聞いたのかは知らない。肺病か何かの病気で、療治のために魚を釣る。毎日鮎あじを釣つて、背ごしにして薬がわりに食う。商売でもなく、楽しみでもない。そのことが、よく呑みこめぬまま良平に氣味がわるい。

そのへんから良平はたんばのあいだへ出る。すこし行くと西里になる。西里は、ほんとの名は別にあらが良平はよく知つてゐない。町の西にあつて、家数なら十軒ばかり、良平の村の四半分くらいの出村のような小村だ。町の西にあるので西里というのだらう。高瀬屋へ酒買ひに行くたんび、郵便局へ手紙出しに行くたんび、行きかえりに西里を通らねばならぬのが良平に苦手になつてゐる。

西里には良平の同級生がゐる。それは二人ゐる。二人とも女だ。「めえろのこ」(女郎の子)だ。北というのは背が低い。丸い、堂様の甘茶仏のような顔をしてゐる。眉毛が上へまるく二つ並んで、伏目が下へまるく二つ並んでゐる。いつでも伏目をして、めがね橋の絵のようになつてゐる。北は非常におとなしい。ぼこい。本多というのは背が高い。北よりも顔も長目だ。濃い眉毛がくつくつように生えている。目をばつちり見ひらいて人の顔を見る。その目が黒くて大きい。ひげが生えている。何となく生意氣に、おてんばに見える。

一年生でも、男の良平は女とは話もしたことはない。話をする必要もない。どつちかというと、良平は本多の方に興味を持つてゐる。それでも、話をしたこともなく、用事があつたこともないのだから、まるまる無関係だと良平は感じてゐる。

しかし西里には、二人の同級生のほかに、同じ学校の生徒がまだ四人ほどいる。みな一年生ではない。四年生、五年生、六年生といったへんだらう。女も一人いるが、あとは男ばかりだ。これが苦手になる。西里は、村は小村だが屋建ちがみない。きちんと垣根をつくつて、それを刈りこんでいる。どの家も大きくて、青壁の門の家もある。刈りこんだ高い生垣にかこわれて、なかに子供が遊んでいるか、外からはわからない。その垣根のかげから、その四五人の上級生がひよいと、ばらばらつと出てくる。出てきたところへ良平の方でぶつかつたのかも知れぬが、良平がくるのを見ていて、四五人の方から出てきたのかも知れない。

良平の行く手へ、その四五人が何となく立ちどまる。一人出てきて、それほど真剣でない調子で通せんぼうをする。それ以上にはしない。道の両側へわかれて並んで、良平が、両側から見られながらその間を通つて行かねばならぬようにする。これもそれ以上にはしない。

何かいいかけることもある。良平は黙っている。簡単に答えることもある。通せんぼうは、相手がわきに退くまで良平も立つている。これは、一度よけてわきから抜けようとしたことがあつた。すると相手もそつちへ動く。それをまたわきから抜けようとする、相手がまた動いた。良平は腹が立ち、泣きたくなり、徳利をさげたなりで仕方なしにつつ立つていた。

やがて相手が、持つていた笹竹で良平の徳利をさわつて、「あははは……」と笑つてわきへ退いた。非常に侮辱された感じで良平は歩きだした。曲り角へきてもふり返つて見られない。それから、相手がどんな顔をして黙つてつつ立つていることにしている。

何で西里の子供らは良平にかまうのだらうか。良平には全くおぼえがない。そんな上級生と学校で顔をあわせることもめつたにない。ただ、ほんのいたずらにからかうのだらう。殴つたり蹴つたりはしない。それでも、なぐりかかれるのよりも良平はいやだ。おまけに、まだ学校前の小ちやい子供たち

が、不思議そうな、それでもおもしろいことはおもしろいといった顔つきでいたずら子供たちに加わつてくる。よちよち歩きくらいのもだが、両側にわかれて、背中を垣の根つ子の「たつのふげ」(竜のひげ)にこすりつけながら良平をみる。この小ちやいののは、二三人くらい押したおしてでも行けるが、大きいのがいるからそれはできない。そのうえ、北と本多とがいる。二人が、いたずら連から少しはなれて、二人だけでかたまつてこつちを見ている。北はやはり伏目をしている。伏目でも見ているとしか思えない。本多は、顔色をかえずに、目をいつぱいに開いて良平がどうするか見ている。気の毒という顔もしない。いい気味という顔でもない。わざわざ見なくてもそれが良平によくわかる。この同級生が、表情を動かさずにいる冷酷さが良平に苦しい。いつまで続くのだろう。良平が五年生にも六年生にもなるまで続くのだろうか。直接乱暴しないこと、何でかという理由が考えられぬこと、そのために逆に良平がいやになる。

しかし今日は、西里の子供は誰も出てこなかった。西里を出はざれるところに大きな「よのき」(榎)がある。鳥がきている。もう葉が落ちかけている。ここまできると、畑とたんぼとの野を越して良平の家の櫓がみえる。ここから家まで、あいだにさえぎるものがない。からりとして気もちがいい。西里の子供がきても、ここから先へは追つてこない。村地籍がかわつてしまう。

櫓が美しく見える。良平は、榎よりも櫓の方が上等の木だと思つている。櫓の方が好きだ。家にあるからでなくて、よその家でも櫓の方がいい。

ときどき良平は、櫓と榎とどこがちがうのか考えてみることもある。どこがちがうのかわからない。見ればわかる。良平の仲間には見てもわからぬのがある。

「ほら、これがよのきじゃが。これがけやきじゃ。」

そういつて教えてやるが、頭ではわからない。どうちがうか口でいえといわれるとそれは困る。

手を持ちかえ持ちかえして良平は歩いて行く。

「ひゅ、ひゅ、ひゅうん……」という音がする。かすかなおもしろい音だ。

何が鳴るのか。

何が鳴るのだからない。

すぐそれが、北風が耳たばにあたつて鳴るのだということに気がつく。これはおもしろい。風のあたる右の耳たばが鳴る。左の耳たばは鳴らない。鳴るのは笛のように鳴る。

そのとき良平は、奥歯のどこかがきりつと痛むのを感じた。

「きりつ……」

それだけですんだが、良平は不安になった。また疼いてくるのではないか。虫歯がまた出たのではないか。思いだすだけで虫歯はいやになる。ずつと直つて忘れていたのだが……

畑の大根がだいぶ伸びている。青くびが二寸くらいも地面から出て、大きい葉が地べたに垂れ気味にふさふさ冠さつている。白い肌のところも持ちあがつている。

「あの青くびをぼきんと折る。爪で皮をぐるぐる剥く。中身が出てくる。まつ白の肌に、半透明の網の目のようなすじがついている。それをがぶつと噛む。あまい……」

そう思ったとき、良平はまた不安になった。大根は噛むとつめたい。歯も顎も力が要る。青くびをかじる——と考えただけで、また歯が痛んでくるような気がする。

じつさいは痛まなかった。しかし不安は去らない。大根は忘れたい。地蔵様はごめんだと思う。

この前、去年もおとしもだった、良平は虫歯で続けて泣かされた。冬がわるい。雪合戦に夢中になる。垂氷取りであつちこつちほつつきあるく。みんな遊びあきて家へかえることになる。すると虫歯が痛んでくる。痛いとも痛い。ずうんと疼く。痛いのは我慢するが、疼くのが我慢できない。しまいに

良平はしくしく泣きだす。

「雪あすびがわるいんじや。雪あすびはやめ。」とおじさんがいう。

「さ、あたつて、あたつて。こつぱりあたつて早う寝ない。」とおばがいう。
寝ると忘れてしまう。それでまた雪あすびに出る。また疼いてくる。

「そんな、泣いていんと、地蔵様へ行つてこい。よおう頼んでくるんじや。」

囲炉裏ばたの柱に、一文銭の綱がかかつている。一文銭をおばは文久銭という。それが五十枚ほど、孔に細縄を通して柱の折れ釘にかけてある。それをおろして、一枚ぬいて、あと縄を結んでまたかけて、その一枚を握つて良平は堂様へ行く。堂様の御拝の手前に、石の垣でかこつた小さい堂がある。その堂のまわりに、苔の生えたのや頭の欠けたのや、背の低い仏様がぐるりと立つている。たおれかけているものもある。頭巾をかぶつて涎がけをかけているものもある。そのなかに虫歯の地蔵様がいる。

虫歯の地蔵様は、青ぐろくぼろぼろになつて、目も鼻も顔はよくわからない。それが、首をかたげて、片つ方の頬に片手あてている。虫歯が痛むので、手でその方を押さえているのだ。

堂様には誰もいない。良平は地蔵様のところへ行つて、一文銭を地蔵様の足のところへ置いて、しやがんで手をあわせて拝んだ。

「地蔵様、地蔵様、うらの虫歯を、どうか直いてくんないのれ。地蔵様、地蔵様、うらの虫歯を、どうか直いてくんないのれ。」

そうして帰ると、帰りにはいくらか痛まない。それでも、明日また雪あすびに行けば同じことだ。

そのうち春になつた。春になるにつれて、痛みが間遠になつて行つた。そしてとうとう痛まなくなつた。良平は虫歯のことを忘れてしまつてた。それがまたやつてきそうにある。しかし良平は、地蔵様へはもう行きたくない。あんなものはあかん、と思つている。大根畑が続いてから蕪の畑になつた。